

特集にあたって

ERでもICUでも、患者さんの状態をとらえてくれる頼もしい相棒として、モニター機器があります。1人で処置をしているとき、血圧や末梢血酸素飽和度モニターの音が、どれほど危機回避に役立っていることか…！でも、ちょっと待ってください。モニタリングは数値だけでみるものではありません。また、最近、新たなモニタリング機器が導入されていますが、皆様、使いこなしていらっしゃいますか？

本特集では、時々刻々変化するさまざまな病態の把握を助けてくれる“モニタリング”を取り上げました。定番のモニタリングも、日常馴染んでいる以上に奥が深く、ちょっと視点を変えるだけで多くの情報を得ることができます。救急にかかわるスタッフがモニタリングに通じることは、診療の質の向上につながります。一方、モニタリングにもピットフォールはあり、頼りすぎると、医療者の観察力や“危機察知能力”が鈍るという向きもあるかもしれません。

モニターの原理を理解し、限界を知りつつ、日々の臨床にお役立ていただけるような内容でご執筆いただきました。